

Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人を紹介致します



合田 直弘

本来であれば第146回ケンタッキー・ダービー(d10F)が行われていたはずの5月2日に、オークローンパークで行われたG1アーカンソーダービー(d9F)は、登録馬が多かつたため2競走に分割しての施行となり、分割1・分割2とともに1番人気馬が快勝。いずれの勝ち馬も、デビューから継続している無敗の連勝記録を伸ばすことになった。

分割1を6馬身差で快勝し3連勝を飾ったシャーラタン(牡3)については、先月のこのコラムでご紹介済みだ。そこで今月は、分割2を3馬身差で制して無敗の4連勝を果たしたナダル(牡3)の解説をお届けしたい。

ボブ・バファート調教師の管理馬であり、2歳時には出走をせず3歳になってからデビューした点でも、シャーラタンと共に通しているのがナダルだ。父ブレイムは、チャーチルダウンズが舞台だった10年のG1BCクラシック(d10F)優勝馬だが、そこで頭差の2着に退けたのがゼニヤツタで、すなわち、歴史的名牝に引退レースで生涯唯一の敗戦を味わわせた、希代の敵役として名を馳せた馬である。同じ年、G1スティーヴンフオスターS(d9F)、G1ホイットニーS(d9F)も制しているブレイムは、エクリプス賞最優秀古牡馬に選出されている。

初年度産駒がデビューしたのは14年で、

重賞勝ち馬は出ていた一方で、G1で華々しい活躍をする産駒はなかなか現れず、大物を出す種牡馬ではなき声が現れた矢先、3世代目の産駒から17年G1仏オークス(芝2100m)勝ち馬センガが出現。思わずこうから孝行娘が現れたと思っていたら、18年春にはセンガと同世代のフォルトがG1サンタマルガリータH(d9F)を、18年夏にはこれもセンガと同世代のマーレイズフリーダムがG1バーリーナS(d7F)に優勝。一世代から3頭のG1勝ち馬が登場し、種牡馬ブレイムの評価は見直されることになった。

19年秋には、ナダルと同世代のアブスコンドが加国G1ナタルマS(芝8F)に優勝。同馬やセンガ以外にも、芝の重賞勝ち馬が複数出ているのは、ブレイムの血統構成を考えると、さほど不思議なことではない。すなわち、サイヤーライムの直系3代目はロベルトで、なおかつ、ボトムライインの3代目は欧州で繁栄するスペシャルという血統背景は、むしろ欧洲色の濃い血脉と言えよう。

ナダルの母の父はブルピット(その父エーピーインディ)で、前出の仏オークス馬センガの母の父がエーピーインディだから、ナダルも芝適性を内包する可能性がありそうだ。

ナダルの母アセンディングエンジェルは

未勝利馬。母の姉にG1スピニスターS(AW9F)2着、G1パーソナルエンスンS(d10F)3着などの実績を残したソールサーチ、その産駒にG3ジミーデュランテS(芝8F)勝ち馬ジャーニーホームがいるが、活力旺盛なファミリーとは言い難く、1歳秋に上場されたキーンランド9月市場では6万5千ドルという地味な価格で購買されている。だが、その半年後、ファングティプトン・ガルフストリームパーク2歳市場に登場した同馬は、公開調教で1Fでは第3位タイとなる10秒0の好時計をマーク。70万ドルで購買されて、ボブ・バファート厩舎の一員となつた。

デビュー戦となった1月19日にサンタアニタで行われたメイドン(d6·5F)を3/4馬身差で快勝すると、次走はいきなり重賞のG2サンヴィセンテS(d7F)に駒を進め、ここも3/4馬身差で勝つて重賞初制覇。続くオーケローンパークのG2レベルS(d8·5F)も3/4馬身差で勝つて臨んだのが、G1アーカンソーダービー! 分割2だった。

ちなみに勝ち時計の1分48秒34は、分割1より0·15秒速く、過去20年のアーカンソーダービーでは最速のものである。9月5日のケンタッキー・ダービーまで、バファート師がシャーラタンとナダルの2頭を、どう使い分けしていくかが見ものと言えそうだ。